唐代湟水上流の諸城塞と吐谷渾の伏俟城について

佐藤長

一

先に青海湖東邊地區の、漢唐代における諸城塞を考えた際に、基本的なルートとして湟水・葯水沿いのそれを取上げ、沿岸に存在する諸城塞については、周希武の寧海紀行（玉樹稿附錄）[1] の比定を一應採用しておいた（歷史地理九四頁以下）。蓋し周氏が民國三年に、玉樹縣方面の調査のため、蘭州—碾伯（樂都縣）—西寧—湟源（丹噶爾）—カラコトル—チャブチャル（共和縣）の道を辿ったときの歷史的地名の比定が頗る肯綮に當るものがあったからである。故に湟源以北の湟水上流地域の地理的狀況、古城塞の比定についても、簡單な氏の記述に從ったのであるが（前揭書一〇〇—一〇二頁）、周氏は湟源以北の地帶には自ら足を踏み入れてはおらず、何によってこの記述をなしたのかは全く不明であった。そこでもしその原材料となった書が發見されれば、漠然たる感のあったこの地帶の地理的實情は、より一層的確に摑めるのではないかとの期待は常に棄てることはできなかった。ただ氏はこの地方の說明に屢々注を入れている中に、三カ所程、湟源縣志なる書の記載を引いており、或はこの書の內容が周氏の本文記述の材料になっているのではないかとの疑いはあった。それでその後問題の湟源縣志を八方搜索したが、如何にしても發見できず、それに關連あるらしい丹噶爾廳志なる書を東洋文庫に漸く見出したのである。[2]

丹噶爾というのは湟源縣の前身で、トンコル Stoṅ ḥkhor の訛音であり、もとはトンコル寺 Stoṅ ḥkhor dgon pa（東科寺）に關連あったものとされるが（玉樹稿二五三頁）、その關連が如何なるものであるのかは明かでない。周氏によれば、この丹噶爾廳が民國元年に湟源縣に昇格し、湟源城と改名されたのであるが（前掲書同頁）それでは湟源縣志というのも、周氏が民國八年に調査紀行文を發表していることを思い合せれば、民國元年—八年の間に出來したものとしなければならない。しかし湟源縣志の存否を確めることができない今は、氏のいうこの書は丹噶爾廳志を指したものと考えるより他はない。たとい今後縣志が發見されたとしても、恐らくそれは時間的に見て、その內容は廳志と殆ど變らないものであるであろう。というのは廳志自體が宣統元年の出版であり、民國元年までは三年の期間しかなく、縣志の編纂があったとしても、これと全く無關係に行われたとは考えられないからである。とにかく今は廳志を以て清末の湟水上流域を考察することは一向差支えないものと信ずる。

ところでこの東洋文庫の廳志は、本文八卷から成る鉛印本であるが、その內容は次のごとくである。最初に、北西はボロチュンクク、南方はカラコトル・日月山・察漢故城から青海湖東岸までの廣域を示す見取圖があり、第二—第五の圖ではそれが一層詳細に分圖として示されている。續いて廳志編纂に携わった人々の序文・凡例・目錄があるが、目錄によってその內容構成はより一層明白となる。

卷一　歷史　政績錄　兵事　會圖
卷二　選擧　耆舊　列女
卷三　地理　森林　戶口　水利　貢賦
卷四　動物　植物　礦物
卷五　商務　實業　風俗　宗教
卷六　山脈　水源　道路　險隘　古蹟　人類

卷七　藝文

卷八　義勇　雜記

次に編纂に從事したものの名が列擧されるが、最後に總纂として貢生邑人楊景昇（字は治平）の名があり、これが本書の著者と見てよい。ただ不思議なのは各卷の卷頭の書名で、各册の表紙には、一貫して丹噶爾廳志とあるに拘らず、第一卷に含まれる各序文の題には、丹噶爾創修新志序と書したもの二、丹邑新志圖書總序・丹噶爾廳新志序・丹邑新志序（楊景昇）・序と書したもの各一の表記が見られ、書名が一致しないのはともかくとして、新志という名が見えることである。新志というと以前に舊志があったようにも思われるが、恐らくは、第一の創修新志の題に見るごとく、新志とは「はじめて作られた」の意であろう。各序の中に舊志があったとの記事は見當らず、事實として舊志は存在しないようである。又凡例の最初にも新志の名が見られ、各卷の卷頭にも、卷一歷史の最初には丹噶爾廳志と記し、卷三―卷六までが書名を缺いている外、卷二・七・八が丹噶爾廳志と書かれている。體裁としては統一を缺いているが、右に述べたごとく各表紙には丹噶爾廳志とあるので、これを以て本書の正式の書名としたい。

尙東洋文庫の藏本は、光緒三十四年の出版とされているが、これは著者楊景昇の序文末に同年六月の紀年があるのによるのであろう。しかしその後に續く談良善の序には宣統元年九月十五日、靳柏齡の序には同年十月初一日の日附があるから、發行は宣統元年或は同二年であったろう。

ところでこの書に關連して思い起すのは臺灣の國立中央圖書館の善本史部地理類都會郡縣之屬に入れられている鈔本の丹噶爾廳新志（存三卷）である。[3] その內容は次のごとくである。

見取圖　廳志に殆ど同じ。

丹邑新志序（楊景昇）　廳志のそれに同じ。

凡例　廳志のそれに同じ。

目錄　卷一に、序・例言・圖考の目あり、續いて歷史・政績錄・兵事・會圖とあり、卷二以下は廳志のそれに同じ。

編纂者名簿　廳志に同じ。

續く本文は不分卷であるが、廳志卷一・三・五と全く同文で、政績錄の淸代の個人の政績の部に文濤・孚慧の來任の記事がなく、又他の數人の政績に一部訂正文が傍行に入れられているだけである。

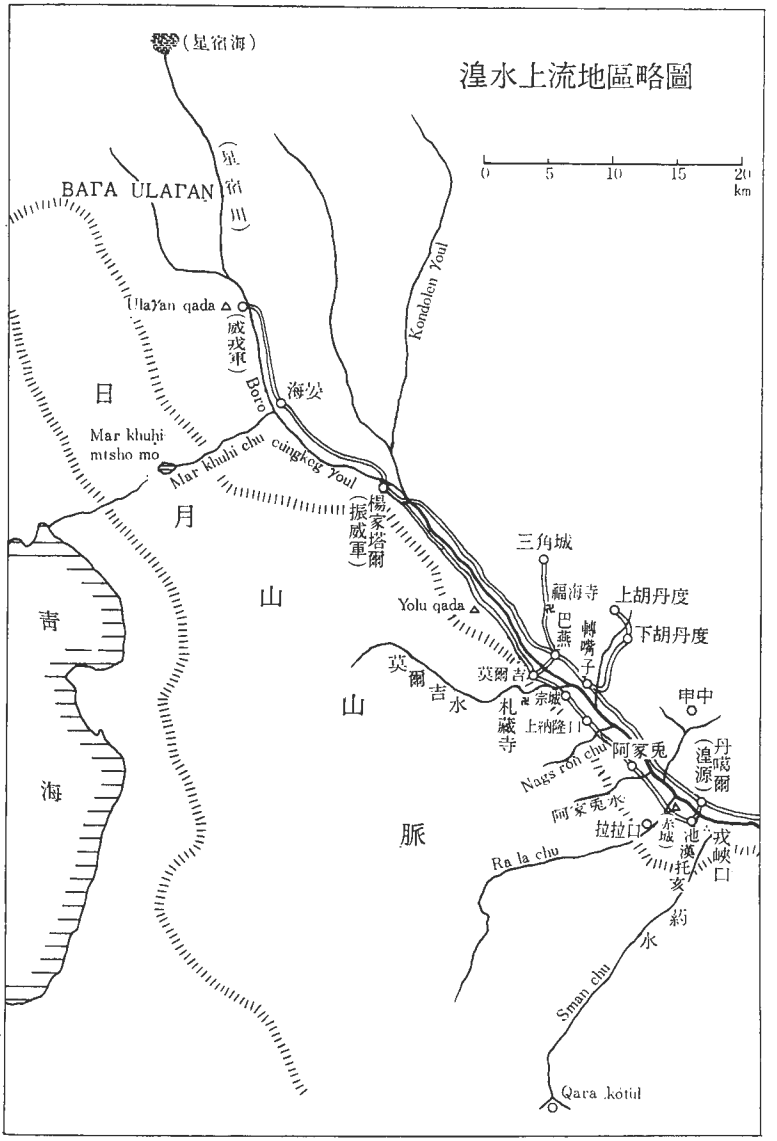
結局この書は廳志の決定稿（印刷以前）の不完全な寫本で、それに當時現在の官人たちの官歷の訂正が一部書き添えられただけのものである。而してその訂正にはそれなりの價値があるのであろうが、その他は資料として廳志に何等加えるものはない。嚴密にいえば、廳志が本來丹噶爾廳新志なのであり、臺灣の鈔本はその不完全な寫本ということになる。從って臺灣のこの書は、一應登錄名によって丹噶爾廳新志とは稱するが、我々が目的とするところの湟水上流の地域の檢討には取上げる必要はなく、ここでは廳志の記述のみによって考察を進めて差支えないであろう。

二

丹噶爾廳志はその書名からして當然丹噶爾廳のことを記すが、ここで取上げるのは、右に述べたごとくそれに附隨して語られる湟水上流域の地理的狀況である。卷頭にはその詳細な見取圖が附されているが、そのより正確な位置づけの下圖にはやはりONCを用いなければならない。それに廳志の卷三地理、卷六古蹟の記事を參照しながら作製した地圖が九二頁の見取圖である。この圖は先に發表した地圖（歷史地理添附第一・第二圖）と少しく相違する點があるが、それらはすべて本見取圖の方が正しいものと見て戴きたい。以下この見取圖に合せて二つの問題を考えてみたい。

第一は當流域における唐朝の諸城塞の位置であるが、それらは南から北へ安人軍・振威軍・威戎軍の順に存在していた（歷史地理一〇〇―一〇二頁）。

（一）　安人軍


湟水上流地區略圖
0 5 10 15 20 km
(星宿海)
(星宿川)
BATA ULATAN
Ulaγan qada
(威戎軍)
Boro
海晏
Kondolen γoul
日
月
山
Mar khuhi-mtsho mo
Mar khuhi chu
cungkog γoul
(振威軍)
楊家塔爾
三角城
福海寺
上胡丹度
下胡丹度
巴燕
轉嘴子
Yolu qada
莫爾吉
莫爾吉水
札藏寺
宗城
上納隆口
申中
阿家兎
Nags ron chu
阿家兎水
拉拉口
Ra la chu
(湟源)
丹噶爾
戎峽口
池漢托亥
藥水
Smon chu
Qara kotul
青海
山脈

新唐書（巻三〇地理志）鄯州の條には注として、

星宿川西、有安人軍、西北三百五十里、有威戎軍。

とあり、元和志（巻三九）鄯州の條には、安人軍を、

河源軍西一百二十里星宿川。

と説明する。星宿川はまちがいなくこの地帯の湟水を指しており（歴史地理一〇一頁）、河源軍は鄯城縣（西寧市）附近に存在していた（前掲書九九頁）。西寧から湟源（丹噶爾）までは、周氏の計算では九〇里であり、唐代の計算では九五里程で、丹噶爾から三〇里足らずの地點に安人軍が存在したことになろう。而して周氏はこれを轉嘴子の所に山城と名附けられる古城趾があり、その山の色は紅色を帯びている故に、水經注のいう赤城であろうといっている（玉樹稿二五四頁）。赤城については西寧志（巻七地理志古蹟）に、「在〔西寧〕縣治西」と曖昧な注を行っているが、廳志（巻六古蹟二六丁右）赤城の項には、

西距丹城五里許、池漢迤西拉拉口之東、有一山嘴、地名山城、土帯紅色、而縁山爲城之勢、隱約可辨、又適在湟水之南、或卽所謂赤城歟。

といっている。恐らくこれが水經注のいう赤城であろう（水經注抄一五九頁）。しかしそれは丹噶爾から五里ばかりという近距離であり、三〇里先となる安人軍に比定することはできない。そこで丹噶爾から三〇里北へ湟水を溯った所にこれを求めると、それは確に轉嘴子の位置となる。轉嘴子については廳志（巻三地理一四丁右）に、

轉嘴子莊、距〔丹噶爾〕城西稍北二十五里。

とあるから、周氏の説は先ずここで距離の上からして赤城とは一致しなくなるが、轉嘴子への比定は非常に可能性の濃いものとなる。轉嘴子は、北は上・下胡丹度莊への道の分岐點であり、北西五里の巴燕から更に北すれば三角城に到達する。距離の二五里も唐代であれば三〇里足らずで、先ず一致するものとしなければならない。しかし重要なのは前掲の新

唐書地理志に、「星宿川の西にある」といっていることで、轉嘴子は湟水の東岸である。そこでその對岸の邊りを見ると、そこにあるのは札藏寺 Grwa tshaṅ dgon であり、これが正しく安人軍の位置に相當るのである。札藏寺の位置については、廳志（卷三地理一三丁右）に、

距〔丹噶爾〕城三十里許。

とあり、距離は元和志の記載に一致し、廳志附圖を見ても湟水の西岸に存在する。恐らく安人軍の廢趾に札藏寺は建立されたのであろう。[4] 周氏は水經注にいう「もと月氏の湟中城」をこの地に比定しているが（歷史地理一〇二頁）、當っていると思われる。

尙嚴耕望氏は、元和志の「河源軍の西一二〇里星宿川にあり」とするのを、唐會要（卷七八）の、

安人軍置在星宿川、鄯州西北界。

とあるのにより、「北西一二〇里」と解し、安人軍は今の大通縣にあったとするが（唐代河湟三一頁）、從うことはできない。[5]

三

（二） 振威軍

振威軍の位置については、同じく元和志鄯州の條に、

州西三百里。

とあるが、この州は勿論鄯州を指している。鄯州（樂都縣）から鄯城（西寧市）までは約一二〇里餘、そこから丹噶爾までは九五里程であるから、振威軍は丹噶爾より八五里足らずということになる。既に轉嘴子までが三〇里であるから、そこより約五〇里北方に軍は存在したのである。そこで湟水を更に溯って行くと、楊家塔爾の位置がそれに當るであろう。周

氏は巴燕の北方、丹噶爾城から四〇里の三角故城をそれであろうとするが（玉樹稿二五四頁）、距離が全く合わない。廳志（巻六古蹟二三丁右）の綏戎故城の條には、三角城について、

城距廳城約四十里、而紐在福海寺之北、此城原屬正方、因東南一隅頽壞、故土人呼爲三角也、城内亦有石虎磚瓦。

と述べているから、四〇里の距離はまちがいなく、古い城塞であることも窺えるが、振威軍に當てることは無理である。廳志はこれを距離の上から綏戎城と考えるのであるが、綏戎城は白水軍の駐屯した所で、丹噶爾の南の察罕素の附近であるから（歴史地理一〇三頁）、北方の三角城ではあり得ない。

又廳志（巻六古蹟二二丁右）は、楊家塔爾を以て臨羌新縣故城に當てている。

今攷楊家塔爾地方、有古城遺趾、城内有石獅等物、湟水從西繞城南而東、一水從西北山谷流來、而東南注於湟、卽臨羌溪水也、去廳城西八九十里、與府志所謂西去縣治百八十里者、數亦相符、楊家塔爾古城之臨羌新縣無疑也。

中に府志というのは、楊應琚の西寧志（巻七地理志古蹟一丁左）を指すが、西寧志は水經注に引かれる闕駰の十三州志を再引するだけで、楊家塔爾が臨羌新縣であるとはいっていない。成程十三州志には、「郡の西百八十里」に臨羌新縣があったとはいってはいるが（水經注抄一五九頁）、郡は西平郡であり、當時の西平郡治は樂都縣である。從って樂都縣から計算すれば、一八〇里は殆ど西寧の西五〇里程の鎮海堡附近となり、周氏のいうごとく土巴 Mdo pa がこれに當ることになる（歴史地理九九頁）。故に臨羌溪水も土巴の側を流れる西納川 Zi na chu であって（前掲書同頁）、楊家塔爾近傍の小川ではない。廳志の場合は、十三州志の「郡」を西寧中心と見た結果で、周氏が最も力を入れて論駁した西平郡治卽西寧説の誤りに陷っているのである。振威軍は楊家塔爾と考えるのが至當である。

又嚴氏は綏戎城を、「大約今の湟源縣」とするが（唐代河湟三二頁）、水經注の戎峽口を「〔綏？〕戎峽口」ととったことから（前掲書三一・三三頁）、湟源縣を連想したのであろう。確に戎峽口は湟源の西に存在していたが（歴史地理一〇〇頁）、これに綏字を加えて解釋するのは氏の武斷である。

戎峽口の位置については、廳志（卷六山脈四丁左）戎硤山の條に、

山在城南迤東三四里許、俗名謂松蛾山、羣山之中孤峯陡峙、與三稜峨博・黑山峨博鼎足而三、土人呼謂柴塔峨博、山坳一泉、其味甚甘、流出山口、西注葯水河、其山北當硤口、湟水經其山垠入硤、上有孤松挺秀、夏時五色蝴蝶、翔集其上、登峯四望百餘里、如在目前、按府志載戎硤山、又謂湟水東入經戎硤口。

と説明している。西寧志（卷四地理山川三丁左）に載せる戎硤山の記述は曖昧なもので、水經注の（水經注抄一五九頁）、

〔湟水は〕赤城の地を過ぎて東へと注ぎ、戎峽口を經て、右手から羌水（＝葯水）を合せる。

を一層簡略化して引用しただけである。しかしてこの文と廳志の文を併せ考えて、戎峽口は丹噶爾の南東、湟水の南岸、董家庄の附近にあったと考えることができる。又戎峽口なる名の「戎」はチベット語のロン Roi（溪谷）を寫したもので、多分チベット人がそのような呼び方をしていたところから來たものであろう。

（三）　威戎軍

この軍の位置は、やはり元和志に、

州西三百五十里。

とその所在を示している。振威軍の記載に合せ見て、楊家塔爾より更に五〇里北へ湟水を溯ることになるが、この位置の比定は難しい。ONC を見ると、楊家塔爾から北西へ行くと海晏があり、現在大飛行場が存在し、西寧からの鐵道の終點にもなっているが、これは現代になってから軍用基地として設けられたものらしい。距離も楊家塔爾から、目測ではあるが、三〇里程であり、到底五〇里には滿たない。しかしそれより更に二〇里程遡ると、河岸に一一〇八五フィートの標高を持つ無名聚落があり、これが威戎軍の位置に丁度該當する。廳志の記事は楊家塔爾までであり（廳志卷三、一四丁左）、それより北方の地域については記載は全くないので、この聚落に關しては何等知ることはできない。但し廳志附圖には烏蘭哈達地方なる地域名があり、ONC ではこの聚落は小山の麓に存在しているので、或はこの小山がウランハダ山 Ulayan

qada であり、その地域がウランハダ地方であるのかも知れない。

尙威戎軍の位置について、嚴氏は、通鑑（卷二一四）開元二十六年の條に、

杜希望によって吐蕃の新城が拔かれ、威戎軍が置かれた。

とあるのを引き、これを臨羌新縣であったとし、新縣は正に今の海晏の東邊にあったとする（唐代河湟三四頁）。而して大清一統志大通縣の條に、「開元中ここに威戎軍を置いた」とするのを安人軍と誤ったものと見なしている（前掲書三六頁）。しかし臨羌新縣は前述のごとく土巴であるから、海晏に比定するのはおかしい。ただ威戎軍を海晏東邊にありとするのは當らずと雖も遠からずであろう。前に觸れたごとく私見によれば、軍は北邊二〇里程の無名聚落に比定できるからである。

四

唐代の諸城塞の位置は以上で一應明白となったと思うが、第二の問題は第五代ダライラマの通過路である。ダライは順治九年（一六五二）に北京に朝覲したが、そのときチャイジから北行し、青海湖の畔に出、更にチャガントロガイを經て、「モンゴル人たちがボロチュンガク Boro chu ḥgag と呼ぶカルタンマルクイツォモ Dkar than mar khuḥi mtsho mo に至っている（歷史地理六七頁）。ボロチュンガクがボロチュンククBoro cüngkeg で湟水の上流域を指し、カルタンマルクイツォモが莫爾吉水の水源をなす小湖であろうということは先に述べた（前掲書同頁）。しかしどうもおかしい。というのは廳志（卷六水源七丁右）には、湟水の發源の一つについて、

出於西塞外附近青海北之亂山中、地名撥洛充克之烏蘭哈達、暨莫揮兎泉水會、流約三四里、臨羌新縣故城南、臨羌谿水自西北來會、又東數十里、經福海寺南、東流至轉嘴子地方、莫爾吉水自西南來會……

と述べ、莫揮兎泉水と莫爾吉水とを別のものとして扱っているからである。この最初のところの文は、西寧志（卷四地理

山川一三丁左）の、湟水の一源について、

西北撥洛充克之烏蘭哈達暨莫揮兎泉水會流、約百餘里、至丹噶爾。

を引用したことは明かであるが、ここでは明白に烏蘭哈達河と莫揮兎泉水が合流している。故に烏蘭哈達河は湟水そのものと考えるより外はなく、又莫揮兎は多分莫兒揮の綴りが正しく、Mar khuḥi を寫したものであろう。而して「泉水」とあるからには、當然その源は小湖乃至は泉であり、マルクイツォモ Mar khuḥi mtsho mo に一致するのである。その位置は、丹噶爾まで「百餘里」という曖昧さではあるが、地圖上の目測からすれば一一〇里で略々海晏の位置に當るであろう。ONC を見ると、そこには南西の日月山山脈から流出して海晏の南で湟水に合する小川があり、これがマルクイ川 Mar khuḥi chu であり、その源がマルクイツォモ湖に相違ない。とすると莫爾吉水は、これとは全く別な川で、廳志の中でマルクイ川との合流から「約三四里」で楊家塔爾に達するというのは、「約三十里」又は「約三四十里」の誤りであろう。以上によってダライはチャガントロガイからマルクイツォモ湖に至り、マルクイ川を傳って海晏の地域に出、更に北方に巡錫して再びここへ戻ったことが明かとなる。而してこの海晏からは湟水に沿ってその流域をヨレトゥ・ナクロン・チャガントホイの順に南下して行くのである（歴史地理六九頁）。

（一）　ヨレトゥ Yo le thu

ヨレトゥの位置については、先に莫爾吉水河口とナクロン水河口の中間と推定しておいたが（前掲書同頁）、誤りである。那彥成の平蕃奏議（卷一四丁左）の附圖を見ると、楊家塔爾の南東「三〇里」の所に岳洛哈達が記されている。多分ヨルハダ Yoluqada（大鷲の〔形をした〕山）で、その山の麓がヨルトゥ Yolutu なのであろう。

（二）　ナクロン Nags roṅ

「樹木が天まで屆くような森林の溪谷ナクロン」と述べられているから（歴史地理六九頁）、上納隆口を通ってナクロン川の溪谷を渡ったのである。納隆は勿論ナクロンを寫したものである。

（三）　チャガントコイ Cha gan tho khuḥi

明かにチャガントホイ Caγan toqui であるが、先にはこれをトゥルゲンチャガンゴール河 Türgen caγan γol（葯水）の渡河點とし、湟水の南岸にあるものとした（前掲書同頁）。しかし廳志（卷三地理一二丁右）、丹噶爾城西鄉の項に、

臨城河（湟水）南、池漢托亥莊……距城西南三里許、池漢大橋一、小橋一、均在本莊之北。

とあり、池漢托亥と丹噶爾との間、湟水に大小各一の橋梁が架けられていることをいっている。勿論時代は光緒末で、そこに橋があっても不思議でない。しかし第五代ダライの時代、順治十年頃には丹噶爾そのものが眇たる一寒村であり、ここに橋があったとは思われない。多分ここには渡津があり、それをダライは渡ったのであろう。とすれば丹噶爾より東は湟水北岸の道で、周氏の辿った道卽ち現在と變らないルートを東進したのである。勿論ここにいう池漢托亥はチャガントホイを寫したものでなければならない。

以上で廳志による丹噶爾以北の湟水上流に關する地名比定及び地圖の修正は終ることにする。廳志には丹噶爾以東・以南の地域に關しても詳細な記述があり、特に以南の記述は日月山又は青海湖岸まで及び、周氏の紀行より地理的に正確で、補う點は多い。しかしルートそのものに關しては流石に周氏の述べるところは的確で、特に修正を要するものはない。丹噶爾廳の歷史は新しく、雍正五年（一七二七）に丹噶爾城が築かれ、道光九年（一八二九）に廳が設置された（廳志卷一歷史二〇丁右・二一丁右）。楊景昇がこの書を成すのには相當の苦心が重ねられたことであろう。一見しても、卷三地理に山川の記述がなく卷六に分れて存在し、宗教の部に關しても、卷五に僅か三丁、ラマ教寺院の存在・組織などが簡單に語られているだけである。又古蹟については右に觸れたごとく歷史的地名の比定には誤りが少くない。しかし一方卷一の歷史・政績、卷四・五には物產についての記述が詳しく、この地方のそれらの事情を知るには格好な材料を提供している。將來青海地方が一つの地方史として把握されねばならぬときには、この書は西寧志・玉樹稿等と並んで重要資料を提供す

るものとなるであろう。

五

湟水上流における諸城塞の位置に關する考察を終ったので、次に吐谷渾の伏俟城の存在について述べよう。嚴氏の論文には、吐谷渾の末期の首都伏俟城の位置について重要な記述がなされているので、それについて一言記しておきたい。

伏俟城が青海湖の西一五里の地點にあったことは、魏書（卷一〇一）吐谷渾傳に述べられており、それはブハ河 Buqa (yin) γoul の下流域、天棚の東邊に存在したと考えられるものである（歴史地理二一六頁、又同書附圖第五圖）。嚴氏はその位置について、黄盛璋・方永兩氏が、ブハ河の支流茱濟河の南邊に存在する故城趾を發見し、それがもと伏俟城であったとする調査記（吐谷渾故都）と、更にその見解を駁する青海省文物管理委員會の來信（前掲書）とを紹介し、自らの判斷を記している（唐代河湟六九頁）。そこで今黄・方兩氏の記すところを簡單に述べると、次のごとくである（吐谷渾故都四三六頁）。

方氏は一九六〇年六月下旬に青海湖地區の地勢を調査したとき、茱濟河の南邊に故城の趾を發見した。それはモンゴル族の鐵卜卡部落[6]の遊牧地で、當地の人々はこの城趾を鐵卜卡と呼んでいるが、モンゴル族がこの地に來たのは新しい時期でこれに關係なく、種々の方面から考えて、それは吐谷渾の故都伏俟城に相違ないとする。而してその證據は次の二つである。

一、　魏書吐谷渾傳には、

　　伏俟城在青海西十五里。

とあるが、湖岸からの最短距離は七・五キロで、方位と距離とは完全に一致する。

二、　青海湖附近は草原地帶で、固定的な建造物は極く少い。ブハ河河谷では、これを除いて古城は一つも存しない。日月山以西、都蘭以東でも亦他に古城は存在しない。當古城は青海湖の西岸一帶で唯一の古城であるから、伏俟城がここ

にあったとするのはおかしくない。又宋雲行紀（洛陽伽藍記巻五）中の「吐谷渾城」も、この伏俟城に相當ると考えられ（吐谷渾故都四三八頁）、道宣の釋迦方志の往印度之東道（所謂入吐蕃道を含む）に、

青海西南至吐谷渾衙帳。

とあるのも、方志が永徽元年（六五〇）に作られており、當時は未だその地は唐に占取されていない故に、ここ（伏俟城）に衙を立てていたことを示す。而してその建設の年代は四八一―四九一年を越えるものではない、と（吐谷渾故都四三八頁）。

即ち黄・方兩氏の説は、宋雲の吐谷渾城、道宣の吐谷渾衙帳が共に伏俟城に一致するとするのである。果してそうであろうか。兩氏はこの稿を完成した後、青海省文物管理委員會にこれを送ったらしく、兩氏の報告の後には、附錄として「青海省文物管理委員會關于〝鐵卜卡古城〟的來信」なるものが附されている（吐谷渾故城四四〇頁）。その内容は、「送られた原稿を讀んだ後、我々は次のような意見を提出して貴紙（雜誌「考古」）と著者に供する」として四か條に分って批評を行っている。これも簡單に記すと次のごとくである。

1、　鐵卜卡古城に關しては解放前に、これを伏俟城と考證した人物がいる。即ち靳玄生氏で、その文「青海歴代城壘遺趾」（西北論衡第六卷一期一八頁）にいう。

隋西海郡、今都蘭縣沿東北境、青海西南隅（原注：距海十五里）、布哈河繞于北、切吉河環于南、依山面水、形勢雄險、城周二・三里、墻垣還沒有十分倒塌、城內野草萋萋、荒涼不可言狀、該城本來是吐谷渾伏俟城……現在當地藏民稱該城爲切吉加垮日、譯言切吉地方上的漢人城。[7]

解放後この記錄と他の文獻により、委員會は人を派して調査せしめたが、遺物は何も得るところなく、故に今に至るも古城即伏俟城説を肯定することはできない。

2、　宋雲行紀によって鐵卜卡古城を伏俟城とすることはできない。というのは、

(1) 赤嶺（原注：今の日月山）から鐵卜卡故城までは七・八日で至ることができ、絶對二十三日などはかからない。

(2) 途中流沙を經るということはない。

(3) 青海の周邊は均しく極寒であり、鐵卜卡附近は特に甚しい。

これら三點は宋雲行紀の、

發赤嶺、西行二十三日、渡流沙、至吐谷渾國、路中甚寒、多饒風雪、飛沙走礫、舉目皆滿、惟吐谷渾城左右煖於餘處。

なる記事に全く合致しない。

3、釋迦方志の吐谷渾衙帳は伏俟城ではない。何となれば、唐代の吐蕃—尼波羅道は青海湖の南邊を南向して行くもので、湖西の伏俟城に至ることはできない。方志の記事の方位・距離が正しいとすれば、それは茶卡湖⑧以南の草原に相違なく、伏俟城とは關係はない。

4、柴濟河は、最近の青海省の地圖によれば切吉河に作るべきである。

嚴氏はこれらの記事に關して種々の批判を行うのであるが、それを引用する前に、委員會の主張に對して私なりの意見を述べておきたい。

1、斬玄生氏が黄・方兩氏に先んじて、既にこの古城趾を發見していたということは、そのまま從わねばなるまい。而して委員會が、この地から、伏俟城であることを證明する證據は何も出ていないから、伏俟城であることは肯定できないとするのは、嚴密にいえば正當である。しかし黄・方兩氏は、青海湖西岸地區では、これより外古城趾は存在しないというところを見ると、やはりこの城は伏俟城と考えるより他はない。距離も兩氏のいうように「青海の西一五里」に完全に一致している。

2、宋雲行紀の吐谷渾城が伏俟城でないというのは當っている。行紀のいう三つの條件に伏俟城は全く該當しない。

吐谷渾城はこれとは別で、ツァイダム北路の德令喀と考えられることは既に述べた（歴史地理二四〇頁）。

3、釋迦方志の「吐谷渾衙帳」も伏俟城ではないというのも當っている。それについては方志の作られた永徽元年頃の吐谷渾の狀況を知らねばならない。貞觀十五年（六四一）に文成公主が吐蕃に降嫁したときに、館の建てられたのは河源においてであった。河源は隋代の河源郡の址で、當然その中心はチャブチャル（共和縣）である（歴史地理一四四頁）。新唐書（卷一四一）吐蕃傳上には、河源を「河源王之國」といっており、この河源王は吐谷渾王を指すとしか考えられない。而して十五年以後貞觀の世の終るまで、吐谷渾王は唐に忠實な附庸であり、吐蕃との閒には何等の紛爭もなかったのであるから、吐谷渾は河源郡の跡地卽ち青海湖の南方の地域にいたとせねばならない。從って衙帳の所在地は、チャブチャルと考えてよいであろう。それならば委員會が衙帳を茶卡に當てているのは正しいかどうか。

確に方志には往印度之東道に、

海（青海）西南至吐谷渾衙帳。

と記しており、青海湖の南西には茶卡湖が存在する。しかしここにいう「西南」は現在の方角でいう南西ではない。唐の時代には青海湖の南方は西方に含められており、正南に横たわる大非川（ホュュン川）なども、「青海の西」に存在したとされるのである（歴史地理一四四頁）。故にここにいう「湖の西南」はまちがいなくチャブチャル及びその南方の草原であって、茶卡などではあり得ない。勿論茶卡は吐谷渾の四大戍の一つ屈眞川 Qujir roul に當てて考えられるから（歴史地理二一八頁）、ここに吐谷渾の衙帳がなかったとはいいきれない。しかし唐代のこの地方の方角についての通念からいえば、それは無理というべきである。入吐蕃道のルートから考えても、衙帳はチャイジタンの東方地域、更に限定すればチャブチャルにあったとすべきである。顯慶三年（六五八）に吐谷渾は吐蕃の攻擊を受け、涼州に逃れたが、そのときの和平の條件に、吐蕃は「赤水の地」に放牧することを唐朝に願い出、拒絶されている（新唐書吐蕃傳上）。この赤水はまちがいなくウランブラク河で、それまでそこに吐谷渾が本據を置いていたからこそこの要求が出されたのであろう。永徽元年から顯

慶三年までは八年間であるが、その期間吐蕃・吐谷渾の間には何等の抗争もなかった。卽ちそれまで吐谷渾の根據地は變らなかったのである。吐谷渾衙帳は確實にチャブチャルに存在を比定できるものである。

4、　柴濟河はチャイジ河 Cayiji γoul に相違なく、多分チャイジ（城塞）の名はこの古城趾と關係あるのであろう。委員會がこれを切吉河に作るべきだとするのは、我々から見れば何れであってもよいことである。但普通チャイジ河は、チャイジタンの南東邊にあるチャイジ（切吉）地方から北東に流れてダブスゴールに入る河を指す（歷史地理三五頁）。青海南山山脈の南北に同名の河が別々に存在するのは何とも紛わしいことである。

六

ところでこの問題を嚴氏は如何に見ているかというと、鐵卜卡古城趾が伏俟城であることについては、何等疑いを挾んではいない。ただ宋雲行紀の吐谷渾城については（唐代河湟七一頁）、

伏連籌は伏羅川にいたにちがいなく、それは宋雲行紀の吐蕃城である。

という。吐蕃城は明かに吐谷渾城の誤りであるが、伏羅川というのは、氏によれば巴隆河（原注：卽ち柴達木河）で、吳景敖「西陲史地研究」[9]（五頁）に從えば、その流域は白蘭の舊境である。而して方志によれば、「衙帳から西南に行けば白蘭」なのであるから、吐谷渾城は伏羅川の東にあったであろうというのである（唐代河湟七一頁）。

遺憾なことには、この考察には餘りにも誤りが多い。伏羅川は先に比定したごとくウランブラク河であり、その中心はチャブチャルであって、[10] 決して巴隆河でもツァイダム河でもない。勿論巴隆は氏のいうごとき伏羅川の「遺音」ではなく、モンゴル語のバロン Barayun（右翼）の寫しであって、十七世紀にこの地に移動してきたホショト族の一部族の遺名である。吐谷渾衙帳については、嚴氏は、「唐初に一般使臣の通過したところであるから臨時の施設である筈はなく、常設の都城であったにちがいない」とし（前揭書同頁）、吐谷渾城と同一と見ている。しかしこれは氏の幻想であって、右に

述べたごとく衙帳はチャブチャルであり、吐谷渾城は德令喀である。白蘭の位置もバロンではなく、私見によればブルハンブダ山 Burqan budda ayula の東邊である（歷史地理三四〇頁）。嚴氏が衙帳と城を同一視し、更に「それが伏俟城である可能性を完全に排除することもできない」とするのは（唐代河湟七一頁）、如何にしても從いがたいものである。結局伏俟城・吐谷渾城・吐谷渾衙帳は各々別の地であり、決して同一の地とは見做すことはできないのである。

以上本論文で私は、嚴氏の唐代河湟地帶の城塞並に吐谷渾の根據地についての研究に對して、取扱った分野に關する限り、否定的な批判を敢てした。しかし氏の研究はその題名の記すとおり、南方の黃河地帶についての歷史地理的研究も含んでおり、參考になる點は決して少くない。多くの漢文獻から史料を蒐め、特に文集類にまで目が及んでいるのは流石は嚴氏ならではと心から敬意を表さざるを得ない。唯本論文に利用した玉樹稿や廳志が全く參考に供されていないのは如何なる理由によるのであろうか。兩書のうち、前者を參照すれば、入吐蕃道、青海東・南邊の部分は的確に復原でき、後者を利用すれば、湟水上流の地理的狀況は暗中模索を脫することができる筈である。氏の研究は、拙著の歷史地理と對照すると、一致する點もあるが不一致の點も少くない。しかしそれらの矛盾については今は第三者の批判に委ね、自らは述べないこととする。實は嚴氏の論考は私の研究よりは數年先んじて發表されており、私の場合には當然氏の研究が參照さるべきであった。それを爲さずして只今においてこのような形での妄評を連ねるのは誠に心苦しく、このことに關しては心から氏の寬恕を請いたいと思う。

註

① 寧海紀行なる題名は、玉樹稿の活字本玉樹土司調査記（北京、民國八年刊）に出てくるもので、玉樹稿では單に「附錄」としてあるのみである。しかし兩者の內容は殆ど一字一句異るところはない。ここでは便宜上玉樹稿の附錄を用いる。

② この書の所在は香川大學助教授植松正氏の教示によって知るを得た。記して謝意を表する。

③ この書は同じく植松助教授の好意により、寫眞本を閲覽することができた。記して厚く感謝の意を表する。

④ 札藏寺の略史についてはテプギャムに記述があり、グシハンの勸請によるものであることが明かである（歷史地理一八五頁注三一）。從來はこれより他に材料はなかったのであるが、廳志卷三森林一七丁左には、

札藏寺小林、距城西三十餘里、札藏寺對面南山垠、大小松樺共約千餘株、亦禁採伐、爲札藏寺僧所有之產業也。

とあり、同じく卷五宗敎二九丁左には、

札藏寺喇嘛一百二十八名、距城西二十五里。

とあり、同じく三〇丁右には、

按札藏寺隸曲卜藏寺、係蒙古種族、亦有附近田土、至數十百石、惟寺僧漸少、不及原額之半。

とあって、淸末期の衰頽ぶりを傳えている。ここに曲卜藏寺というのは、チュサンゴンガンデンミンギュルリン寺 Chu bzaṅ dgon dgaḥ ldan mi ḥgyur glin であり（GT. p. 109）、西寧志（卷一五祠祀志一〇丁左）に、大通衞の東七〇里に存するとされる朝藏寺であろう。この寺院の創設年代は己丑の年（一六四九）である（DG, I, p. 197）。

⑤ 嚴氏の論文は、京都大學大學院研修員王霜媚小姐の好意によって一覽するを得た。記して厚く感謝の意を表する。

⑥ ユンテンギャムツォ氏の地圖を見ると、青海湖の北邊にテプジャ Theb rgya なる地域名がある（Yon tan rgya mtsho, Amdo, l'une des trois provinces du Tibet）。少しく北へ偏り過ぎている感はあるが、これが鐵卜卡の原語であろう。

⑦ 切吉加垮日はその譯言から察するに、チャイジジャカル Cayiji rgya mkhar（チャイジの中國人の城塞）であろう。

⑧ 茶卡湖はツァカツォ Tshwa kha mtsho の寫しで、青海湖南西のダブスノール Dabusu nayur を指す。その北岸にツァカ Tshwa kha なる地がある。

⑨ この書は筆者（佐藤）未見である。

⑩ 佐藤長「古代チベットの若干の地名について」『史林』第六二卷五號、一九七九年、七〇頁。

略語表

元和志＝李吉甫「元和郡縣圖志」

西寧志＝楊應琚「西寧府新志」乾隆十二年。

廳志＝楊景昇「丹噶爾廳志」宣統元年。

玉樹稿＝周希武「玉樹縣志稿」（影印本）、臺北、民國五十六年。

水經注抄＝森鹿三・日比野丈夫「水經注（抄）」中國古典文學大系二一、平凡社、昭和四十九年。

唐代河湟＝嚴耕望「唐代河湟青海地區交通軍鎭圖考」新亞學報第一一卷上冊、一九七四年。

吐谷渾故都＝黃盛璋・方永「吐谷渾故都——伏俟城發現記」考古、一九六二年第八期。

歷史地理＝佐藤長「チベット歷史地理研究」岩波書店、昭和五十三年。

テプギャム＝DG.

DG＝Dkon mchog batan pa rab rgyas, Deb ther rgya mtsho, Delhi, 1972.

GT＝Turrel V. Wylie, Geography of Tibet according to the 'Dzam-gling-rgyas-bshad, Rome, 1962.

more was the traditional belief with the base in localities. Whereas the state sacrifices were often in name only, the local belief, grown out of the need in everyday life, enjoyed genuine support. This point becomes even clearer when considering alongside the existence of the *she-ch'uang* 社倉 granary throughout the Sung.

T'ang 唐 Military Outposts on the Upperstream of the Huang-sui 湟水 River and the Site of Fu-szu ch'eng

Sato Hisashi

The upperstream of the Huang-sui river lies on the northeast of the Lake Kokonor. During the T'ang dynasty this was a militarily important area, and several military outposts were established.

The only source containing comparatively detailed information on the area has been the *Yü-shu hsien-chih kao* 玉樹縣志稿. This, however, reportedly consists only of quotations from the *Huang-yuan hsien-chih* 湟源縣志, the search of which has been carried on for some time, but thus far in vain. Recently, I managed to acquire a book titled *Tan-ke-erh t'ing-chih* 丹噶爾廳志, which I believe served as the original text for the *Huang-yuan hsien-chih*. By examinig the text and attached maps, I could come up with a clearer understanding of the area before Huang-yuan county was established, including the location of T'ang military outposts.

In addition, Fu-szu ch'eng 伏俟城, the last capital of T'u-yü-hun 吐谷渾, is said to have located 15 *li* 里 west of the Lake Kokonor. The expedition led by Huang Sheng-chang 黃盛璋 and Fang Yung 方永 found ruins on the southern shore of the Cayijiγoul river, a tributary of the Buqaγoul river, and determined them as the site of Fu-szu ch'eng. Some scholars, however, raised doubts since then; subsequently, the question remains unresolved. In my opinion the doubts come largely from misreading the related sources, and the site found by Huang and Fang is certainly that of Fu-szu ch'eng.